

中之条町発掘調査報告書第10集

下沢渡伊賀野遺跡



1989

中之条町教育委員会

序

中之条町は、長い歴史と優れた文化をもち、古くから吾妻郡の政治・経済・文化の中心的役割を果たし発展してきました。

近年、中之条町でも開発に伴う緊急発掘調査が行われるようになり、原始・古代の遺跡を解明していくうえで、多大な成果をあげています。

このたび、東京電力株式会社による下沢渡伊賀野地区の鉄塔建設予定地を発掘調査したところ、縄文時代の住居跡を中心に数基の遺構を発見するに至りました。標高550mを越える場所に住居跡があったという事実とその規模の概要を知ることができたことは、中之条町の歴史に新たな1ページを加えたことになるでしょう。

発掘調査にあたり、ご指導いただきました県教育委員会文化財保護課、ならびにご協力いただきました関係各位に深く感謝申しあげ、本報告書が多くの方々に活用されることを念じ序文といたします。

平成元年3月31日

中之条町教育委員会教育長 一場秀司

例 言

調査体制

1 本書は、群馬県吾妻郡中之条町大字下沢渡伊賀野1523番地外に所在する埋蔵文化財包蔵地の緊急調査報告書である。

調査主体者

中之条町教育委員会教育長 一場秀司

2 本遺跡は、下沢渡伊賀野遺跡（しもさわたりいがのいせき）と呼称する。

調査担当者

唐澤 至朗（群馬県教育委員会文化財保護課主任・派遣）

3 本書の執筆・編集は調査担当者があたり、図版等の作成は各調査員が行った。

調査員

田村 宏司（中之条町教育委員会社会教育課社会体育係長）

4 本書に用いた資料のほか、調査に関わる一切の記録・遺物は、中之条町歴史民俗資料館に保管してある。

福田 義治（中之条町歴史民俗資料館主事）
保坂 雅美（群馬県教育委員会文化財保護課臨時職員・派遣）

なお、略号には「SS」を用いた。

5 本書の作成に際し、次の各位の指導・協力を得た。記して、謝意を表す。

調査作業員

小渕 幸子・金井フキ江・青藤 つね・
清水 夏子・富澤けさよ・湯本重太郎・

梅澤重昭・神保佑史・水田 稔・東京電力株式会社中之条工事事務所

吉田 むつ

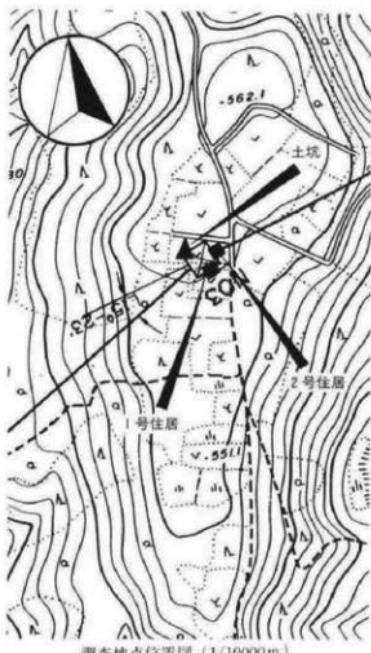
1 調査に至る経緯

地方の時代との呼び声とともに国内における多極化が図られつつある中で、依然首都圏の複合的消費構造は、容易に転換し得ない状態にある。電力の消費量の増大はそのまま都市型文化の進展のパロメーターとされ、それに対応するために新たな供給源が求められるに至った。東京電力株式会社では、これらの需要に応えるため、既に稼動中の柏崎刈羽原子力発電所から山梨県内に新設予定の新山梨変電所に至る長さ140kmの群馬山梨幹線建設を計画し、文化財保護法を含む諸規制との調整を全域でおこなった。

中之条工事事務所管内においては、群馬県教育委員会が昭和62年8月に遺跡の分布調査を実施し、その結果を提示し調整に当たったが、新発見の本遺跡については用地取得上設計変更が困難なことから、緊急調査のやむなきに至ったものである。

中之条町教育委員会は、調整結果をふまえた東京電力株式会社の依頼を受け、平成元年2月13日から14日の間、別記体制で調査を実施した。

2 遺跡の位置と環境



調査地点位置図 (1/10000m)

中之条町は群馬県の北西域、吾妻郡の中央に位置している。吾妻郡域のほとんどは峻険な山塊に占められ、利根川の一大支流である吾妻川が郡域の中央を貫いて東流している。吾妻川両岸はじめこれに合わさる各川には河岸段丘が形成されており、段丘上には先土器時代から現代に至るまでの、連續とした人々の営みをうかがわせる遺跡の分布がみとめられ、調査の進展にともない、その様相が明らかになりつつある。

下沢渡伊賀野遺跡は、吾妻川支流の四万川右岸、標高555mの丘陵状段丘に占地しており、これは下段の段丘面から4段目にあたる。面は南北に長く、東西約150m、南北約500mの平坦な南向きの緩斜面であり、このほぼ中央に僅かに遺物の散布がみとめられる。表探しする遺物は小形のフレイクがほとんどで、製品及び土器片の採集は極めて困難である。日照・通風もよく、現況は煙地となっているが、湧水は下位段丘に委ねられる。

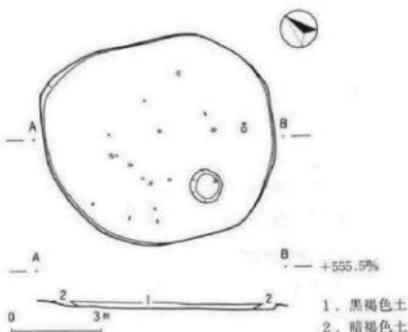
3 遺構と遺物

(第1号住居跡)

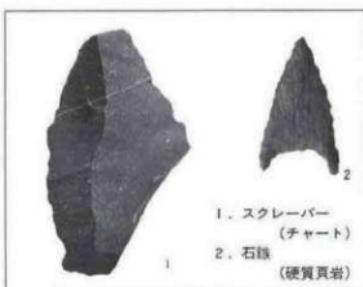
本遺構は調査区の東辺に検出された。平面形は東西がやや長い不整長円形で南東部に張り出しがある。東西長3.1m、南北長2.3m、壁高は復元しても15cm程度である。床は中央寄りがやや硬いほか、比較的軟弱である。施設としては南東隅の壁上に浅いピットが1ヶ所あるのみで、焼土等は検出されなかった。

遺物は、床面上の中央やや東寄りに散在していた。点数は細片を含め11点である。

土器はいずれも細片で復原しうるものはない。文様は羽状及び斜行縄文のみで、口縁部に低い山形をもつ。焼成はよいが粗製である。石器は大型のものなく、石鉋・スクレイバーが各1点出土したほかは、細かなフレイクが數点伴出している。縄文時代前期の所産と考えられる。



第1号住居跡実測図

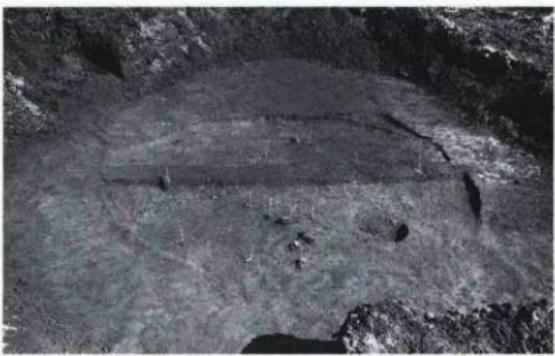


第1号住居跡出土石器 (1/1)



第1号住居跡出土土器片

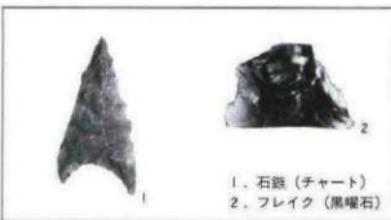
(1/2)



第1号住居跡全景・
遺物出土状況



第2号住居跡実測図



第2号住居跡出土石器 (1/1)

(第2号住居跡)

本遺構は調査区の南辺に検出された。平面形は南北にやや長い円形を呈し、南北長2.65m、東西長2.45mを測り、壁高は5cmほどしか残っていない。床面は第1号住居跡に比べ硬質で南辺がよく踏み固められていた。床面の南寄りにピットが1ヶ所設けられていた。深さは、同様に7cmである。焼土等は、こちらでも確認されなかった。

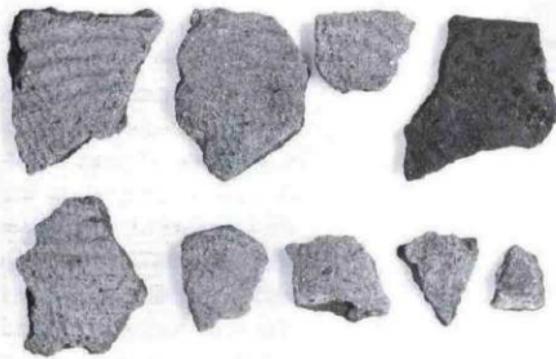
遺物は、床面上中央付近に散在していたが、フレイクが多い。点数は21点である。土器片は1号と同様、粗製のものが数点出土したに過ぎないが、同様に縄文時代前期の所産と考えられる。

(その他)

分布調査時の表採により、土器の細片少量、飾り玉1点、石鏃3点、フレイク多数が得られた。飾り玉は黒色硬質頁岩製・空豆形で、研磨され両面穿孔の孔が二つある。



第2号住居跡全景。
遺物出土状況



第2号住居跡出土
土器片 (1/2)

(土 坑)

本遺構は調査区の北西にあり、長軸を北東南西方向にとる長円形である。北に接して本遺構より古く浅い円形の落込みがあり、これを切って設けられている。さらに周辺には根によるとおもわれる擾乱穴がある。本遺構の規模は、長軸長1.65m、短軸長1.1m、深さ20cmを測る。中には大躁を中心に大小12個の偏平な躁があった。一部に破碎面があるが、自然躁である。底面に接するもの、浮くものと一様ではない。南寄り底面に焼成痕がある。遺物は全く伴出せず性格不明である。



土坑実測図 (1/60)



土坑全貌

4 調査の成果と課題

今般の調査は、約100m²というかなり限定された面積に対しておこなったもので、本遺跡の全容を語りうるものとはなっていない。しかし、遺物の散布状況や、遺構の検出状況がともに希薄であり、それらの共通性から大略は知ることはできるであろう。

まず、円形の住居跡であるが、2基ともに壁高は復元しても15cmほどしかなく、柱穴と思われるビットは南または南東に1ヶ所のみ、炉穴・焼土は皆無という状態であり、これから想像される上屋は南もしくは南東に開く片屋根の簡素なものとなろう。次に定住性を示す大型土器の破片・石皿等の遺物は表探をも含めて皆無であり、一方、粗製の小ぶりな土器の破片・住居の規模のわりに多い石鏃とその破片・フレイクなどが、遺構に伴出する状況は、この住居の使われかたが非定住であること、ひいては本遺跡の季節的使用・キャンプとしての性格を示すものと考えてよいであろう。

本遺跡に近接する縄文時代前期の集落遺跡としては、宿割遺跡（昭和60年10月調査）・下平遺跡（昭和61年9月調査）などが知られているが、本遺跡との同時性については不明であり、セットとなるべき集落遺跡の検討は、周辺の詳細な調査を待つことになるであろう。

近似するこのような例は、赤城村津久田の梨木平遺跡（昭和62年12月調査）に1基あるが、類例は少なくあまり知られてはいない。これは、この種の遺跡の立地上の共通点として山深くの現状の林中に多く所在することが想定され、なおかつ簡素な構造と希薄な遺物散布とが重なり、発見が困難となりがちであるところにある。しかし、この時代の社会構成を知る上で、欠くことのできないこの種の遺跡は、開発行為が山間地に及んでいる今日、人知れず破壊の危機にさらされるところとなり、開発調整のなお一層の適正化が望まれるのである。

参考文献 桐谷 優 1985「大塚遺跡群（宿割遺跡）」中之条町教育委員会
巾 隆之・福田義治1986「下平遺跡発掘調査概報」中之条町教育委員会



喬り玉 (1/1)



調査地点

中之条町発掘調査報告書第10集

下沢渡伊賀野遺跡

印 刷 平成元年3月25日

発行者 中之条町教育委員会
〒377-04 中之条町中之条1091番地
TEL 0279-75-2111

印刷者 朝日印刷工業株式会社

500m 0 500 1000 1500